

## 生態園の自然観察プログラム「森の調査隊」

林 浩 二

### 自然体験を促す「森の調査隊」

「森の調査隊」は、子どもたちの自然体験・自然観察活動を促す、ワークシートを使うプログラムで、2003年に開発された。2003～2004年というのは、中央博30周年のちょうど中程にあたる。それ以来、森の調査隊は中央博の教育事業に大きな影響を及ぼしてきており、博物館のこれからを考える上で参考にいただければありがたい。

開発の中心にいたのは、生態学研究科に所属していた浅田正彦で、同じく生態学研究科の平田和弘と林浩二が初期段階から実施に加わった。開発者自身によって背景・開発の過程などが詳しく説明されているので、プログラムの開発の履歴としても参照されたい（浅田2005～2006）。

当時子どもたちの中に、生態園のやや暗い森の中にはいるのをこわがる子がいるという話がきっかけだった。育つ場所により違いはあるだろうが、自分自身が子どもだったころと比べて、現代の子どもの自然体験がひどく貧しいものになっていることはしばしば指摘される。このまま何もしかけをしなければ、誰もやってこない生態園になってしまいかねない、そんな強い危機感から、浅田はプログラムを開発した。

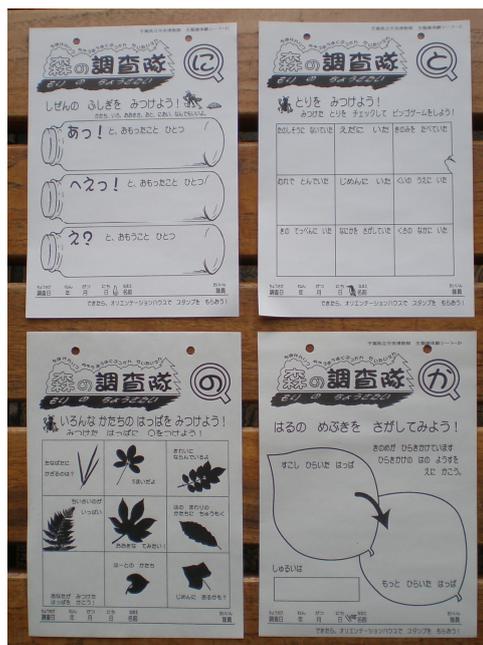
開発に当たっては、地域の学校教員、また学校周辺の市民の協力を得たことが大きい。加えて、外部資金を得てペーパークラフトの制作・増刷やプログラム冊子の増刷、スタンプの制作、別バージョンのワークシート作成などにも取り組んだ。

### 森の調査隊のやり方

森の調査隊は、その当初から、実施日・実施時間を限って運営された。それは子どもと対話する「聞き役」の存在を必要としたからである。森の調査隊の手順は以下のようなものである。

生態園の出入口近くの展示施設でもあるオリエンテーションハウスに並ぶ季節に適したシート十数種ほどの中から、参加者はいずれか1枚を選び、生態園を一回りして調べて記入し、オリエンテーションハウスに戻って、観察してきたことを報告する。博物館のスタッフやボランティアが聞き役となり、子ども（参加者）が見つめてきたことを話してもらい、聞き役は、子どもが発見したその経験を頭の中で思い出すように問いかけ、また子どもの発見を評価し、ほめる。ごほうびはスタンプ押しで、1回につき、生態園の生きものスタンプを1

つ押せる。3回やってスタンプが3個たまるとオリジナルの生態園の生きもののペーパークラフトを進呈する。ワークシートは約50種、ペーパークラフトも十数種ある。



森の調査隊のワークシートの一部



生態園の生きものペーパークラフトの一部

家族・個人向けには、当初、土日祝や夏休み期間中は連日実施したこともあった。諸事情により少しずつ減って毎月第2・第4日曜日となり、平成30年度は月1回、祝日・休日を中心に実施している。回数が減っても開催を楽しみに来てくれる子どもがいる。

近年になって、博物館等の施設を訪れる子どもの低年齢化が注目されるようになってきている。森の調査

隊では登録参加者の学校名・学年を尋ねてきたので、いわば定点観測してきたことになる。分析はこれからだが、2004年以來の参加者の年齢の変化を実証できる可能性がある。

### 森の調査隊の学校団体への実施

森の調査隊は、当初から学校団体等に向けては主に平日に予約制で実施してきた。近隣の小学校5、6校では、同じ児童が年2～4回生態園で自然観察を行うことが慣例化している。それらの学校は鉄道など公共交通あるいは徒歩で来園し、午前中だけ活動して、給食に間に合うように帰校するように計画を立てる。荒天で日程を延期することがあっても、給食は予定通りで済むのは助かるらしい。教員が交代しても毎年のように計画してくれるのは、生態園での学びを教員・学校が評価してくれているからと想像でき、とてもありがたいことである。

小規模校で3・4年生合同の校外学習に継続してやってくるケースがあった。このとき、毎年であっても、春に来園した翌年は秋というように日程を組むと、3年生の春に来園した児童は4年生では秋に、3年生の秋に来園した児童は約半年後の4年生の春に来園することになり、年1回の来園であっても工夫次第で異なる季節の生態園での観察ができることになる。

これらの学校団体の対応をしながら、子どもが複数回訪問することの意味について気づくことがあった。初めての場所に連れていかれた時、子どもは、文字通り右も左も分からない中、少しずつ空間を理解しようとする。またそこで何をしようのか、何をしようはいけないのか、大人の様子、反応をうかがって、そこでの「ルール」を理解しようとするようだ。一度の滞在は2時間足らずでも、2回目、3回目と回数を重ね、そして、自分たちが歓迎されている環境の中で活動するうち、子どもたちはここでは何をどこまでやってよいのかを学び、いちいち大人の様子、反応をうかがうことなく、伸び伸びと活動できるようになる。子どもからの「報告」を聞いたり、子どもが記入したワークシートを見ていると、来園の回数を重ねるごとに細部にまで注目できるようになるなど、自然の見方が成長することを実感するようになった。これは対応するスタッフが共通して感じたことで、子どもが学ぶ環境やその心理学的な意味を考える際に大きな示唆をもたらすように思う。

### 学校団体の下見と打合せ

生態園の利用の希望があると、できるだけ下見・打合せにおいでいただくようにしている。その際に、生態園での活動をどの教科のどんな単元の中の活動と位置づけるのか、お尋ねして確認する。その際に意識するのは、子どもが生態園（あるいは博物館）のような訪問先で過

ぎす時間は、子どもが学校に戻って、あるいは家で、地域で過ごす時間と比べてごくわずかだということである。それゆえ訪問先で何をするかよりも、学校に戻ってから、家や地域で何をするかのことを考える方が大切だと思うようになった。その上で、訪問先としての生態園で何をするか、スタッフがどのように学習を支援するかを考えたい。

遠足・外出の時間は確かに特別な経験ができる時間だが、日常・平常の活動とかけ離れたことをしても、その時だけで終わってしまうことになり、あまりにもつたいない。そこで生態園での活動を、たとえば学校の年間の学習計画と連動させるように提案している。

### ボランティア・インターンシップ実習生

森の調査隊の聞き役を博物館職員だけで務めることは当初から考えにくかった。小学校団体が来園するときには登録されたボランティアのみなさんに声をかけ、園路でのアドバイスや子どもの報告の聞き役を務めていただくようにしている。

生態園で夏休み期間中に高校生のインターンシップ実習生を受け入れた時には、この森の調査隊の活動を中心に据えた。全体で4日間あれば、生態園を歩き、森の調査隊のワークシート数種類を自分なりに体験し、聞き役の練習もしたあと、残り2日ほどは実際に子どもたちの相手をして聞き役を務めてもらうことができる。夏休み期間中の週末などに飛び飛びではあっても森の調査隊を何回か実施できていけば、インターン生を受け入れることができた。

ボランティアのみなさんや高校生に社会的な活躍の場を提供できるという点で、森の調査隊には、長期間の訓練を経ずとも高校生がすぐに取り組みして手応えがあるプログラムという、もう一つの意味がある。

### その後の展開

森の調査隊の中の、子どもが主体的に探す、見つける、それを報告する、という活動の場を森の中から本館の常設展示室へと移したのが「中央博調査隊」である。紙面が尽きたので、中央博調査隊については改めて紹介していただくことにしよう。

### 文献

浅田正彦 2005-2006 自然体験プログラム「森の調査隊」のわけ - その1・その2・その3, ミュゼ (72) : 22 - 23, (73) : 26 - 27, (74) : 28 - 29.

林浩二 2012 初等教育理科 46 (5) : 34 - 35, 46 (6) : 34 - 34, 46 (7) : 34 - 35

(※職員名はいずれも敬称を略しました)

(教育普及課)